

平成講釈

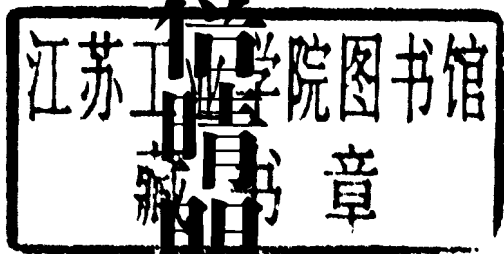
安倍晴明伝

夢枕獏



平成講釈

安倍晴明伝



夢枕獏

中央公論社

へいせいこうしゃく あべのせいめいでん  
平成講釈 安倍晴明伝

一九九八年 四月 七日 初版発行  
一九九八年 四月 二〇日 再版発行

著者 夢枕 獏

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社

〒一〇四・八三二〇

東京都中央区京橋二・八・七

電話 販売部 〇三(三五六三)一四三一

編集部 〇三(三五六三)三六六四

振替 〇〇二一〇・四・三四

印刷 大日本印刷

製本 大日本印刷

Printed in Japan CHUOKORON-SHA, INC.

© 1998 Baku YUMEMAKURA

ISBN4-12-002782-1 C0093

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

平成講釈 安倍晴明伝

目次

序  
まずは口上のこと

第一席  
本朝の秀才安倍仲磨  
道を求めて唐へ渡ること

第二席  
あやめの子孫安倍保名  
陰陽の道に入りしこと

第三席  
尾花丸帝の御悩を  
癒さんと都へ上ること

第四席  
尾花丸宮中にて  
蘆屋道満と問答せしこと

第五席  
尾花丸宮中にて  
蘆屋道満と呪争いすること

233

204

142

99

26

7

第六席 唐の大妖狐  
本朝にて蘇ること

277

第七席 蘆屋道満大妖狐と  
タツグチームを作りしこと

296

第八席 夢枕獏秀斎スルタンの国にていよいよ  
物語が佳境に入りしことを宣言すること

314

第九席 夢枕獏秀斎久かたぶりにバイオレンスト  
エロスの語り手となつて大団円となること

339

第十席 夢枕獏秀斎次なる講釈を約束しつつ  
ひとまず本編の語りを終えること

375

装幀・挿画  
南  
伸  
坊

平成講釈 安倍晴明伝





## 序　まずは口上のこと

春であります。

うるわしき春であります。

光風動春。

風光りて春動く季節。

水色の窓に寄りかかりて、独り嬉しきことを想い、気ままなる旅になど出てみたくなる春であります。

平成八年三月、弥生の頃――。

帝都の風水ぬるみ、今まさに蓄ほころびかけんとする桜の頃、ここに、ようやくこのお断を始めることができますのも、天真爛漫、春爛漫、まことに感慨無量のことでもあります。

そもそも、この物語を書こうと思いたちましたのは、今を去ること五年前。本来であれば『小説中公』というお座敷で、一席うかがうことになっていたのでございます。

しかし、まだその機熟さず、卵を抱く親鳥のごとくにこのお断を温めておりますうちに、ようやく準備整い、ではいよいよ平成八年の新春からと心づもりをしておりますところ、なんと、この予定していたお座敷『小説中公』が儻くも休刊とは、あいなつてしまったのでございま

た。

栄枯盛衰は世のならい。生者必滅、会者定離。よどみに浮かぶ水泡は、かつ消えかつ結びて久しく止まりたるためしなしとは、鴨長明の『方丈記』の言葉であります。世の中の人出版物も、またかくのごときものでございます。

無常が世の理とは申せ、いや弱ったなあ、困ったなあと思案しているところへ吉報が入り、お座敷を『小説中公』から『中央公論』へと移してやりましょうということになり、とんとん話がまとまって、本日の口上とはなつたのであります。

さて――

本日、これよりわたくしが、皆さまに講釈いたしまするお断は、本朝が生みましたる稀代の陰陽師、安倍晴明公の物語でございます。

名づけて「平成講釈 安倍晴明伝」。

この安倍晴明公、いかなる人物であるかと申しまするに、ただいま紹介いたしました通り、職業は陰陽師でございます。ではこの陰陽師とは何であるかということではありますが、何分にも千年以上も昔の職業でありますので、わたくしにも、すぐにはよい喩えが思い浮かびません。

超能力者、というのとはちよつと違います。呪術師、というのとも、似てはおりますがやはりどこか違うようです。

技術職ではあります。学べば誰でもその技術が身につくというものでもありません。

ちなみに、百科事典で引いてみますと、次のように記載されております。

【陰陽師】（おんみょうじ）

「おんようじ」ともいう。大宝令の制で陰陽寮や大宰府に置かれた方術専門の官人。占筮や地相して吉凶を知ることをつかさどったが、平安時代になり陰陽寮のつかさどった天文、暦数、風雲の気色をうかがう方術を陰陽道とよぶようになると、陰陽師もそれらの方術を使う者すべての名称となった。平安中期に賀茂忠行が出てこれを世業化して賀茂家というが、子の保憲系統は暦道を中心とし室町中期から勘解由小路家、ついで幸徳井家とも称した。忠行、保憲の高弟の安倍晴明の流れは天文道を主とし、室町中期以後は土御門家という。これを求めたものは古代の貴族層のみならず、中世以後は武家、近世になると庶民にまで広がった。

『日本大百科全書4』（小学館）

いやはや、これではますます何のことやらわからなくなっていました。

ま、手つとり早く言ってしまったえば、主に平安時代、朝廷に仕えていた職能占い師——こんな風に理解しておいていただければ、ひとまずはよろしいかと思われます。

たとえば、貴人が外出するおりに、方位を観、その方角があまり良くないものであれば、いったん別の場所へと移動し、そこから目的の場所へとあらためて移動するという、方違えというやり方を指導したりするのが、この陰陽師であります。

空手の技でいえば三角飛び、あるいは、本命の女の子に最初は声をかけず、隣りの女の子に声をかけて気を引いておいてから、やおら目的の女の子に声をかけるといいうのも、この方違えの一種でございましょうか。

近頃、眼にしたり耳にしたりする言葉に、風水ふうすいというものがあります。

この風水、中国に生まれた概念、あるいは技術のことで、香港などには今も風水師と呼ばれる人たちがいます。

この風水師は、陰陽師という職能師たちと非常に近い存在と考えてよいでしょう。

風水師は、山や水が造り出した大地の気脈を観たりいたします。中国的な思考によれば、もともと、人間の身体には、気というエネルギーが流れているということになっています。その気や氣の流れが乱れることによつて、病になると考えられており、すなわち、氣を病むことから、病氣という言葉が生まれています。鍼はりや灸きゅうなどという治療法は、この氣や氣の流れと密接に関係しております。そのような氣の流れている場所や脈筋、氣の中継センターが、ツボであるとか、経絡けいらくとか呼ばれているものなのです。

このような、人の身体に流れている氣、ツボや経絡にあたるものが、この大地にもあるのだと、風水は教えています。

大地の気脈の流れの良い場所に、家を建てたり、都市を建設したりすれば、その家や都市は、おおいに栄えるであろうと風水師たちは考えています。

こういった複雑な大地の気脈を、山や河などの地形や方位から読み、どこにどういう家や都市を建設すればよいかを、風水師は、昔であれば皇帝に、現在であれば施工主にアドバイスします。唐の都長安などは、その典型的な例でございます。

時代が現代で、たとえば施工主がそこに、もう、家やビルを建ててしまっていたら、窓の位置をどうするか、テラスやドアの位置をどう変えたらよいかというようなことを、この風水師が

観て診断をするわけです。診断されたビルの持ち主は、言われるままに、あらためて小規模の工事をし、ドアや窓の位置をかえ、風水師に高い見料を払うことになります。

香港の場合、風水師はまだ現役であり、そのトップクラスはかなり儲かるいい商売であるとも言えます。

平安京という都もまた、このような風水の力学によって建設されました。

この都は、そもそも桓武天皇が、藤原種継暗殺事件に関係したということで廃太子にした早良親王の怨霊を畏れ、たった十年で長岡京を捨て、遷都して建てたものであります。怨霊への恐怖——それが、桓武天皇より後の世まで、伝統的に京の都の闇の部分を支配しているのです。

ですから、平安京の内外には、そういった闇の力から、天皇を守るためのシステムが無数にございます。

たとえば、京の都を守護しているのは、その東西南北に自然の山や川を依り代にして配置された、四神獣であります。

まず、

東が、鴨川の青龍。

西が、山陰道の白虎。

南が、巨椋池の朱雀。

北が、船岡山の玄武。

このように、都の東西南北を四頭の霊的な、象徴された獣によって守護させることは、四神

相応という中国的な考え方、技術から来ているのです。

さらに申しあげておきますれば、比叡山は、内裏から見て北東の方向にあります。このこと、決して偶然ではありません。北東——つまり艮の方角であり、すなわち鬼門であります。この鬼門の方角から、都を守るために、比叡山の存在があるのでございます。まことに平安京という都市は、百鬼夜行、魑魅魍魎の跋扈する空間であつたのであります。

かようなる都の闇をば背景にして、陰陽師と呼ばれるような職能者が存在できたのでございますが、それらの細かい話、京の都の呪術的なシステムについては、このお断を語つてゆく間に、おいおいお話し申しあげる機会もあるかと思われます。

さて、そこで本編の主人公、安倍晴明公のことでございますが、公こそは、この平安京の呪術技術者たちの大親分でございます。

生まれは、延喜二十一年（九二二）、死亡したのは寛弘二年（一〇〇五）と言われていますから、これを信ずれば、八十五歳まで生きたことになっております。

官位は従四位下。

天文博士であり、呪詛や占いにたいへんな力を持つていたと伝えられており、逸話も多くあります。

晴明公の話が記された書物は、『今昔物語集』、『大鏡』、『古事談』、『宇治拾遺物語』、『源平盛衰記』、『発心集』、『峯相記』等々、数えあげてゆけばきりがございません。

式神と呼ばれる、この世のものならぬ鬼や精霊を手足のごとくに使つていたと言われ、蛙を柳の葉で押し潰して殺してしまつた話や、晴明を試そうとしてやってきた陰陽師の使う式神を隠し

てしまった話などは有名です。

花山天皇の讓位を天変で予知したり、箱の中のものを、蓋を取らずにあてたりしたこともございます。まことに便利な能力であり、現代であれば、たちまちにして競輪、競馬で巨万の富を築きあげることできます。

彼の、紫式部のタニマチ的存在であつた藤原道長の危機を救つたのも、この安倍晴明でございます。

道長公が、法成寺建立の工事現場においでになつたおり、可愛がつっていた一頭の白い犬をお連れになりました。

ところが、法成寺に入ろうとすると、この犬が前を走りまわつて、道長の牛車の中に入れてようといたしません。

「今日はいつたかどうか。まあ、どうせたいしたことではないのだろうが」

と、道長が牛車を降りて、徒歩にて中へ入ろうとすると、今度は着ているものの裾を噛んだり、引いたりしてゆかせまいといたします。

さすがに道長も、

「これは何やら子細のあらん」

と、踏み台を召し寄せてそれに腰を下ろし、

「晴明を呼べい」

と使いを出しました。

やつてきた晴明に、道長が理由を告げますと、晴明、これを占つて、



「道の途中に、道長さまを呪う品が埋められております。もし、これを越えられましたらたいへんなことになっておりました。犬は、通力のものにてありますれば、これを察して、道長さまをおとめ申しあげたのでございましょう」と言う。

「いったいどこに埋められておるのだ。清明よ、これを見つけ出すことはできるか」「たやすきこと」

と、清明、しばらく占つて、

「ここでございます」

道のある場所を示しました。

さつそくそこを掘らしてみると、五尺ほどの地下から、何やら出てまいりました。土器をふたつ合わせたもので、黄色いこよりで十文字にからげてあります。開けてみれば、中には何もなく、ただ、朱砂で土器の底に一字が書かれていますばかりでございます。

「これは、たいへんな呪法でございます。この清明以外には知る者として無しと思っておりますが、あるいは道摩法師あたりが仕掛けたものやもしれませぬ」

清明、懐より紙を取り出し、鳥の形に結んで呪をかけ、それを天に向かつて投げあげれば、たちまちその姿を白鷺と変じて彼方の空へ飛んでゆきました。

「あの鳥がどこへゆくかを見届けよ」

下部の者に追わせると、白鷺は、六条坊門万里小路あたりの、古びたる家の諸折戸の中へ入つてゆきました。